



昭和 52 年 8 月 9 日、上田雅也は愛知県で生まれました。

父は京都出身の雅三(まさぞう)、母は種子島出身の成子(なりこ)。

当初は二人の名前の一文字ずつを授かった、「上田雅成(うえだまさなり)」の予定でした。

しかし、長仙寺というお寺に名前を見てもらったら「字画がよくない」と言われたので、「成(なり)」を「也(なり)」に置き換え、「雅也(まさや)」となりました。





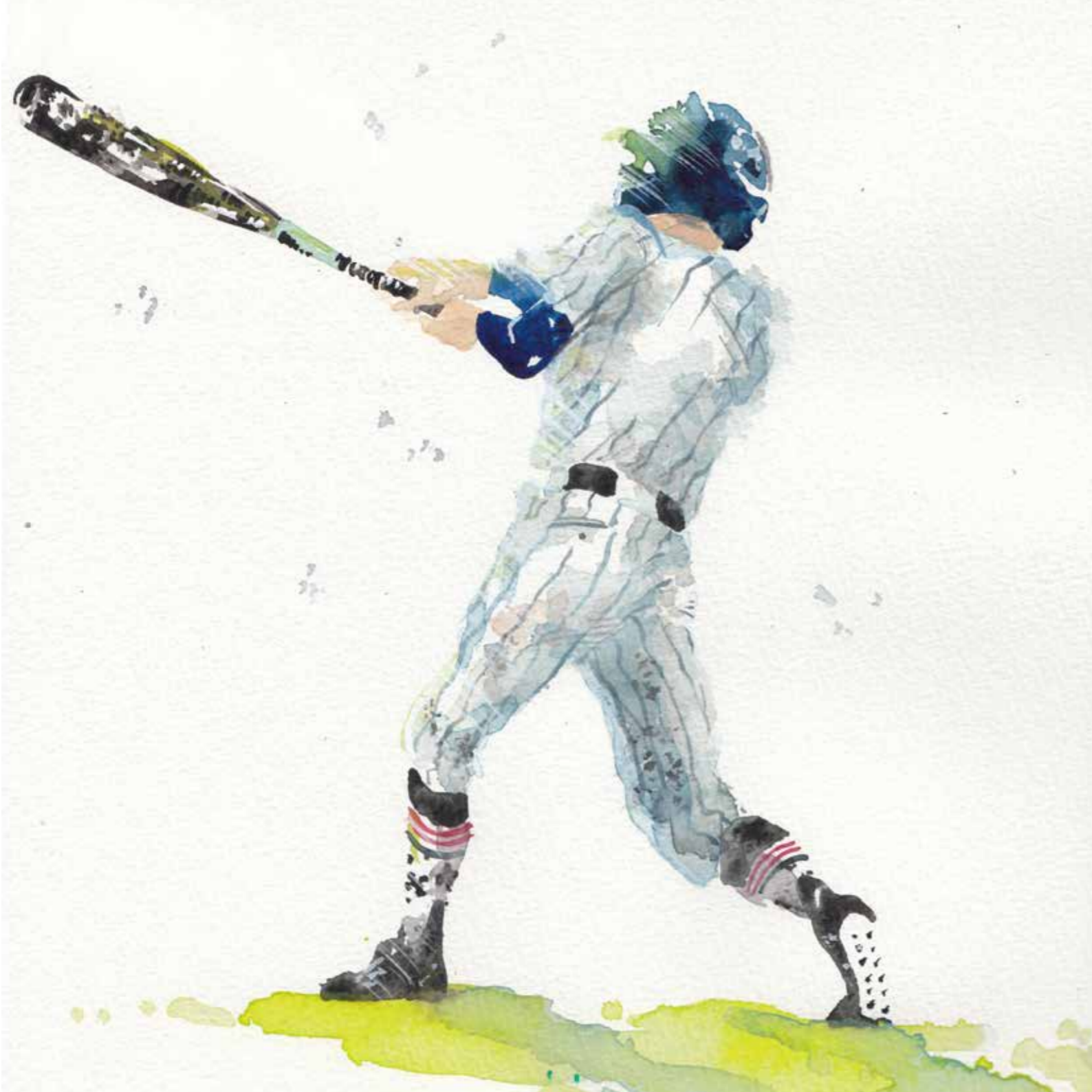
雅也は親の期待に反し、とにかく叱られっ子に育ちました。

小学5年生の写生大会では、「遠くから見た電線」と題して線を一本しか描きませんでした。

6年生の時のタイトルは「お寺の石垣のドアップ」。鼠色の絵の具を画用紙いっぱい塗りつけて、石ころを貼り付けました。

両方とも、先生に殴られた上でやり直しでした。

しかし、雅也は勉強はできました。のちに、親から打ち明けられます。「あんたは先生にこう言われていたんだよ。”勉強ができなかったら単なるクズ”って」



そんな雅也も小学5年生の時に野球と出会い、のめり込みます。毎日欠かさず、マスコットバットで素振りを100回以上行いました。中学生になったら1.5kgのバットを200回、雨の日だろうと毎日振りました。

その甲斐あってか、中学3年生の時には3番サードとして、愛知県大会準優勝、東海大会優勝を経て全国大会に出場。愛工大名電など甲子園常連校から複数のスカウトを受けます。

が、進学先は野球の強豪校ではありませんでした。勉強のできる名門校でした。地元で最も賢い子の集まる高校・時習館からもスカウトが来ており、親が私に意向を訊ねることなく、二つ返事です承っていたからでした。





地域一番の優等生集団の一員となった雅也は、早速、半年でスカウトされた野球部を辞めます。監督と揉めたからでした。

しかし、野球の代わりに勉強を始めます。特に数学と英語に注力し、数学に至っては偏差値 70 を超えるほどまで成長しました。

ただ、他の教科はからっきしでした。そして、そんな調子でセンター試験を迎えるのですが、その結果は散々でした。日本史こそ、試験 2 週間前から死ぬ気で勉強を始め、何とか偏差値 60 までに仕上げます。しかし、理科は 0 点でした。勉強する時間が全く取れず、一問も解ける自信がなかったので試験すら受けなかったのです。

「お前はクズじゃない。クズを燃やして残るスス」

これは高校 3 年生時の、担任の言葉です。今では考えられない暴言ですが、一方では「上手いこと言うなあ」と、傷つきながらも感心したものでした。





それでも、雅也は何とか信州大学の経済学部にすべりこみます。が、問題が一つありました。信州があまりに魅力的すぎて、一瞬でその虜になってしまったのです。おかげで雅也は入学早々、一年目で留年が決定します。

失態はさらに続きます。5年かけて学校を卒業したのに、就職できなかったのです。そればかりか、せっかく時間をかけて就職できたところもすぐに転職してしまい、それを何度も繰り返します。

結局、そうやって転職を繰り返した5社目です。働き初めた3年目でその会社が倒産し、雅也は露頭に彷徨います。

その頃には結婚もして娘もいました。どうする、雅也。ハローワークに通いながら、どうしたらよいかわからない日々を送ります。





しかし、それがきっかけとなりました。

年齢を考えれば、転職しても未来はあまり明るくない。だったらこの際、やりたいことをやってみてはどうだろう。

禍福は糾える縄の如し。

倒産という不幸に見舞われたからこそ、雅也は人生をかけて会社を設立します。それが「株式会社イオジャパン」です。

雅也はシナリオライター・コピーライターとして、様々なコンテンツ制作に取り組みます。また、その一方で、松本で最初にデジタルサイネージに着手したり、シニア向けフリーペーパー「コンパス」を発刊します。

平成 25 年のことでした。



そして、令和 4 年 6 月現在。

雅也はとても幸せです。妻がいて、娘がいて、最初の息子(パピヨン)の利休は他界したけれど、いまはポメラニアンの子・吟がいます。

「お前はクズ」

「お前はクズを燃やして残るスス」

雅也は色々言われてきましたが、今は胸を張って宣言します。

「クズを燃やして残るススは、墨(スミ)の原料。私は筆にたっぷり墨を含ませ、太く力強く、自分という人間を多くの人々の心にしたためたいと思います」

雅也は人生を綴ります。

家族にとって、社会にとって、“すみ(隅)”に置けない男になるために。